

家系とともに生きていく家

林 恩好

家というのは、人が住むための建物です。

また、生活の中心となる場所です。私の家は、
父親が二歳の時にできました。もう五十年以
上も前に作られたことになりました。新しくな
いのですし、皆が見ても普通の建物にすぎない
と思われるでしょう。

ところが、友達の家を訪ねて初めてうちの
家の特別な所が分かるようになりました。一
番言いたいのは、個人的な空間のことです。
うちの家は友達の家と違って、個人の部屋は
ありません。個人の部屋というより、個人の
空間と呼ぶ方が合います。例えば、私と妹が
勉強したり眠ったりする所は、ドアが四つあ
ります。一つは一階へ、一つは三階へ、他の
二つは別の空間へ行きます。ですから、誰で
も自由に入れます。自分のプライベートはち
ともありません。パーソナルスペースとい
えば、自分の机やベッドしがありません。

母と子供達は、時々新しい家を買おうと言
いました。しかし、父は二歳からこの家に住
んでいるので、家にとっても深い愛着を感じま
す。子供の頃から、ずっと父親を守っている
この家は、父の親のような存在です。末、子
の弟も十歳になりましたが、この家はまだ
家族を守っています。それに、自分のプライ
バシーのないの家で育った私達は、そんな開
放的な空間のおかげで、仲良くなっただのかも
しれません。よく顔を合わせるし、家で一緒
に遊ぶことも少なくないです。私達にとって、
この家で暮らしている時間は、宝物のような
記憶なので、たくさん文句があっても、家を
壊したくないです。

私が家を出て、七年になります。もう往ん
でいないけれども、私にとって実家は自分の
根のようです。自分の家が永遠に生き続けて、
ずっとこのうちの家族、家系を守ってほしい
です。でも、今のままでは、使用上の欠点
がたくさんあります。どうすればいいかと思っ

て、大学の建築学部に入りました。大学では勉強のために、よく建築の作品集を見ました。特に気に入っているのは、日本の建築家の住宅です。立派な邸宅ではなくても精緻で雰囲気の良い家です。それに、動線や収納スペースもよく考えられていて、家事をするのは楽々です。家庭の一人ずつのためのパーソナルスペースの上品なアイデアもたくさんあります。

私は台湾で「劇的ビフォー・アフター」という日本の番組を見ていました。内容は、家の不便や危ない所^{ところ}を直して、新しい家造ることです。新しいと言っても、元の家の記憶^をを失わせません。建築家達は、依頼者の気持ちを理解して、元の家の何か材料として、新しい物を設計します。元の家を壊さず、反対に古いものを活しています。私はその番組を見る度に、実家を思い出し、うちの家もそのような改造したいと思いました。

現代社会の人間は、人生の段階が進むとと

もに、ヤドカリと同じように、できるかぎり
好きに自分の住むところを変えるでしょう。
子供の頃は、住むところを選ぶことができ
ないけれども、社会人になると、家を買うた
めに貯金し始める人は少なくないでしょう。
まずは狭いアパートですが、収入が増えるに
したがつて、高級マンションを買おうかと考
えるようになります。結婚して、一戸建て住
宅に住む方がいいと思う人もいるかもしれ
ません。でも、私にとって、思い出が充溢こ
の家は、どうしても変わりたくないです。家
族血脈が続けば、この家も一緒に続けてい
てほしいです。お嫁に行っても、子供を連れ
て帰り、実家の中で子供の頃から暮らした痕跡
を探しながら話したいです。この夢が実現で
きれば、言葉では表せないほどあたたかい気
持ちになるでしょう。それは、私にとって一
番嬉しいことです。